

日本ラテンアメリカ学会 会 報

№ 1 1

1 9 8 3 年 4 月 1 日

第 1 1 号 目 次

1. 理事会報告
2. 学術・文化情報
3. 事務局から

○ラテンアメリカ研究センター
めぐり

○定例研究会のお知らせ

1. 第 1 4 回理事会報告

1983 年 1 月 29 日(土) 13:00~17:00
於東京, 番町共済会館。出席理事 7 名。

○報告事項

- i) 会報 10 号を編集発行した。
- ii) 会費納入状況 現在未納者数は 4 4 名, 延べ人数で 6 4 名である。

iii) 予算執行状況 1 月 11 日現在で,

収入 1,855,916 円

支出 1,420,589 円

残高 435,327 円

iv) 年報 3 号編集進行状況 1 月 22 日(土) 京都外国語大学において編集会議を開いた。鶴見俊輔氏記念講演の起し原稿は完成した。論文 2 篇, 研究ノート 2 篇が到着し, 選考中である。他に, 第三回大会シンポジウム報告, 本年度刊行邦語文献の書評三篇の原稿を依頼した。

v) 文部省科学研究費によるラテンアメリカ研究者名鑑の作成 学会会員名簿を利用して調査票 397 部を配布した。2 月 20 日締切で回収する予定である。

○審議事項

i) 入・退会審査 書類を検討のうえ, 正会員 5 名・賛助会員 2 社の入会を承認した。退会希望者 3 名についても同じくこれを承認した。この結果, 正会員数は 233 名, 賛助会員数は 10 社となった

ii) 出版物販売 某大学の西洋史研究屋より, 年報を校費で購入したいとの申し出があったのについて, これに応ずること, ただし原則は総会に向けて検討することを決定した。それに際し, 年報 2 号のバックナンバー価格を会員向け 1,500 円, 会員外 institutions 向け 3,000 円と定めた。

iii) 第四回大会 会場は成城大学, 日取りを 1983 年 6 月 4 日~5 日と決定した。組織は組織委員会に一任することとし, その構成は, 委員長を正会員中川和彦氏に依頼し, 国本伊代・高山智博両理事及び事務局運営委員を加え, さらに正会員福島正徳氏に依頼することを決定した。

iv) 正会員加茂雄三・吉森義紀両氏が訪中するので, 両氏に学会を代表して中国のラテンアメリカ研究者との交流を促進することを委嘱することを決定した。

2. 学術・文化情報

i) シモン・ボリーバル生誕 200 周年記念国際研究者会議について

本年 7 月 18 日より 24 日まで, ベネズエラのカラカスにおいて開催される。主催機関は, ベネズエラ歴史アカデミー (ANH)。以下に主題一覧を要約する。(敬称略)

- A. シモン・ボリーバルの世界, 1783~1830.
 1. 同時期の世界経済の動向 (議長 T・E・

ラテンアメリカ研究センターめぐり(9)

— 大阪外国語大学 —

「本学は外国の言語とそれを基底とする文化一般について、理論と実際にわたって教授研究し、国際的な活動をするために必要な高い教養を与え、言語を通じて外国に関する理解を深めることを目的とする。」大阪外国語大学学則にうたわれているように、言語を通じて外国に関する理解を深めるのがその目的であるが、どちらかと言えば、言語に重点が置かれていることは明らかである。従って、教育に関しては、特に前期(1, 2年生)においては語学の学習が最も重視されている。

こうした事情から、従来、ラテンアメリカ研究と教授も語学演習の延長といった感があった。しかし最近、かなりの変化が見られ、それぞれの語学科に語学、文学、文化、政治・経済といった4つの柱が設けられるに至って、次第に専門化し、本格的な研究が行われるようになった。現在、ラテンアメリカ研究はイスパニア語学科とポルトガル・ブラジル語学科の教官が中心をなしているが、一方、社会科学系の教官の中にも、この地域を専門にする研究者がいる。これらの研究者は、目下のところ、個々にそれぞれの分野の開拓につとめており、特に共同研究といったものはない。研究発表機関は大学の「学報」のほか、イスパニア語学科からは *Estudios Hispánicos* と題する雑誌が出ている。もっとも、同時にラテンアメリカ以外の地域に関する研究も掲載されているのではあるが。また、大学院修士課程が設けられて10年余りになるが、その間、ラテンアメリカの文学、文化、言語を研究した院生の数もかなりある。

大学の学部におけるラテンアメリカ関係の教育については、ここ数年間に開設された講座名を見ることによってほぼその全容を知ることができるだろう。

イスパニア語学科

語学、文学、文化、政治・経済の4つの柱についてそれぞれ講義、演習、実習がある。

語学関係では「アメリカ・イスパニア語」、文学関係では「イスパノアメリカ文学」、「イスパノアメリカ現代文学」、「イスパノアメリカ文学入門」、「イスパノアメリカ近代文学」、「イスパノアメリカ文学史」、文化関係では「イスパノアメリカの民俗」、「イスパノアメリカ植民地制度研究」、「イベロアメリカ史」、「インディヘニズモ研究」、「イスパノアメリカ文化概論」、「イスパノアメリカ現代史」、「イスパノアメリカ文化史」、政治・経済関係では「中南米経済」、「イスパニア対中南米関係論」、「ラテン・アメリカ経済論」、「イスパノアメリカの政治発展」など。

ポルトガル・ブラジル語学科

この学科が誕生してまだ数年しか経っていないが、新しい教官の定員充足によって、講座も次第に充実しつつある。語学関係では、「ブラジルのポルトガル語」、文学関係では「イベロアメリカ文学史」(イスパニア語学科と共通)、「ポルトガル・ブラジル文学史」、文化関係では、「ポルトガル・ブラジル文化概論」、「ポルトガル・ブラジル文化史」、「ブラジル文化研究」などがある。また、一般教育科目の中に「ラテンアメリカ経済事情」の講座がある。

これらの講座の開設に当っては、専任教官だけではまかないきれないので、イスパニア語学科、ポルトガル・ブラジル語学科とも、他大学から非常勤講師の来援を仰いでいる。

図書に関しては、基本的な図書の購入のほか、雑誌などもかなりの数が定期購入されているが、決して満足すべきものではない。

○ 研究員 (年令順)

山崎俊夫 教授 (経済学)
吉田秀太郎 教授 (文学)
巢山靖司 教授 (政治学)
染田秀藤 助教授 (文化)
東 明彦 助手 (文化)

カリリョ・バタリヤ, 報告者I・ウォーラシ
ュタイン, C・フルタド, B・H・スリヒヤ
・ヴァン・パート) 2. 同時期の大西洋世
界を通じての思想・人間・商品の交流(議長
Ch・ベルリンデン, 報告者L・セア, Ch・
ヘイル他) 3. 同時期への比較史的アプロ
ーチ a. 政治行政構造, b. 軍, c. 卸売
商業, d. 国民統合, e. エリートと独立革
命, f. 社会成層, g. 奴隷制, h. 原住民
セクター, i. 農業構造, j. 大衆と独立革
命。(A・ブレベル・カリアス, J・マルチ
ェナ, M・del C・ベラスケス, S・J・ス
タイン, S・ビリャロボス, M・ルセナ・サ
ルモラル, E・アルシラ・フェリアス, T・
ポランコ・アルカンタラ, J・ドミンゲス,
B・R・ハムネット, G・カレラ・ダマス,
M・メナー, M・ゴンゴラ, J・ロックハ
ート, H・ファーヴル, M・アコスタ・セー
ニユ, P・マセラ, D・プレイディング, J
・リンチ, H・ボニリヤ, M・イサル・リョ
レナ他)

B. 今日の視点からするポリバル時代 1.
同時期の研究への現代方法論の適用(H・ク
ライン, C・F・S・カルドソ, R・マカー,
H・トバル, E・フロレスカノ, M・ロドリ
ゲス・カンボス他) 2. 19世紀における第
三世界の解放闘争(報告者B・トリリ) 3.
シモン・ポリバルの世界史的意義(O・パ
ス, G・アルシニエガス, J・H・ロドリゲス,
A・トバル, A・ウスラル・ピエトリ)

ii) 文部省科学研究費補助金(総合B)によ
る第二回研究連絡会議について

文部省科学研究費補助金(総合研究B)の
研究計画「ラテンアメリカ地域研究の問題点
—学際的研究計画のための連絡」第二回会
合が1983年1月8日(土), 東京・郵便貯金
会館にて開催され, 研究代表者増田義郎他17
名が出席した。

この会合ではまず, 津田塾大学, 新潟大学,
東京外国語大学, 筑波大学, 上智大学におけ
る研究と教育の現状について, 各機関に所属
する研究分担者から報告を受けた。その後日
本におけるラテンアメリカ研究者名鑑作成の
ための調査票について審議を行ない, その最
終案を完成した。最後に, 今後の共同研究計

画組織の方法, 特にラテンアメリカ資料セン
ター設置の可能性について, 第三回連絡会議
において討議する旨確認して閉会した。

なお名鑑作成用の調査票については, 既に
397部が配布された。

iii) 太平洋沿岸ラテンアメリカ研究学会
(Pacific Coast Council on Latin
American Studies)第28回年次総会に出
席して

丸谷吉男(アジア経済研究所海外調査員)

私は1981年4月から2年間米国UCLA(カ
リフォルニア大学ロスアンゼルス校)ラテ
ンアメリカン・センター客員研究員としてメ
キシコの政治, 経済の研究に従事しておりま
すが, 1982年10月14日~16日に米墨国境両側
のサンディエゴ市とティファアナ市の両市にわ
たって開催された上記学会にセンターのスタ
ッフとともに参加する機会をもちましたので,
その研究発表のテーマを紹介し, 日本ではあ
まり知られていない同学会の活動について,
会員の皆様のご参考に供したいと思います。
(セッション番号, 『共通論題』, 『個別テ
ーマ』の順で記します)

(1)『ラテンアメリカにおける事業経営』,
「新技術導入のための企業戦略」, 「ペルー
における企業経営」, 「メキシコの事業への
経営参加」, 「カリブ地域の地域開発とイニ
シアチブ」, 「ラ米における国際的企業経営」,
(2)『中米からの証言』, 「現在の中米危機と
統一」, 「国民国家と中米の将来」, 「ニカ
ラグアの政治発展」, (3)『移民と労働: 北部
国境におけるメキシコ人の経験と回顧, 1598
—1982年』, 「国境地帯における移民と労働」,
「米国南西部におけるメキシコ人労働者, 1848
—1940年」, 「ブラセロと不法入国者, 1940
—1982年」, (4)『バハカリフォルニアの民族
史』, 「18世紀バハカリフォルニアの社会」,
「バハカリフォルニアにおける社会的, 人口
学的変動」 「グアダルルーペ・バレーの発展」,
(5)『国境の両側におけるチョロ』, 「チョロ
のイメージ」(スライド), (6)『国内政治に
おけるバハカリフォルニア』, 「政治的担保
としてのバハカリフォルニア中国人」, 「バ
ハカリフォルニアに対するメキシコ革命の影
響」, 「バハカリフォルニアにおける民族革
命党」, (7)『国境地帯の保健・衛生問題』,

(8)『絵画, 石油, 政治および利益:米墨間文化交流』, (9)『偉大なる南西部の発見』,「偉大なる南西部とは」,「偉大なる南西部に関する地域研究と文献」, (10)『メキシコ移民と南カリフォルニア:1980年代における社会的, 経済的インパクト』, (11)『ラ米における軍事政権へのオールタナチブ』,「ペルーの政治と軍部」,「キューバにおける軍部と革命の制度化」,「メキシコの政治における軍部」, (12)『メキシコと米国における女性解放運動』,「1920年代」,「1970年代」,「米国, メキシコおよびペルー」, (13)『国境地帯の調査:期待と危険』,「国境地帯の調査の功罪」,「国境地帯の文化的側面」,「乾燥地と水資源」, (14)『国境地帯の人口学』,「ティファアナにおけるメキシコ人インディオの同化パターン」,「ティファアナの死者の日における文化的特徴」, (15)『現代のラテン系米国人女流作家』,「セセリア・ブスタマンテの詩におけるイメージとプロセス」,「ロサリオ・カステジャーノスの作品における女性像」,「ロサリオ・フェルレの物語」,「シリア・ポレットティの話法の展開」, (16)『中部メキシコの民族史』,「16世紀の公証記録」,「絵画スケッチ」,「コルテスの手紙」, (17)『バハカリフォルニア史の探求』「1910-1920年のバハカリフォルニアにおける社会的, 職業的階層分化」,「バハカリフォルニアの人口史の資料としての住民登録」,「1886年のバハカリフォルニアにおける米国企業」, (18)『最近のメキシコ経済情勢と国境地帯経済への影響』(ラウンド・テーブル), (19)『国境地帯文学』,「タト・カセウアにおけるニヒリズム」,「文学的空間としての国境地帯」,「ロランド・イノホサとアルベルト・リオスの作品における国境地帯」, (20)『メキシコ革命の再発見』,「ヘンリー・レーン・ウィルソン:共謀の証拠」,「革命期の国境地帯管理」, (21)『ラ米の公衆衛生におけるシャーマン』,「ペルーのシャーマンの特徴」,「エクアドルにおける民間医薬」,「シャーマニズムの哲学と脳的作用:ペルーの事例」,「ペルーの女性薬草学者とその治療法」,「ペルーにおける植物幻覚, 性およびシャーマニズム」, (22)『門戸開放から回転ドアへ:第一世代チカノ大学生』, (23)『現代キューバ文学』,「カルペンティエルとキュー

バ歴史小説」,「新しいキューバ歴史小説」,「小説におけるキューバの歴史的現実」,「現代キューバ文学研究文献」, (24)『ラ米における人権問題』,「キューバ革命とパナマ人」,「アルゼンチンにおける反革命と人権問題」,「チリにおける教会と人権問題」,「トルヒーヨ治下のパナマにおける人権と市民の自由」,「亡命者組織と人権」。

1955年に設立された同学会はメキシコ, カナダおよび米国の太平洋沿岸地域のラテンアメリカ研究者にとってきわめて重要な組織であり, 近年はアジアおよび大洋州諸国の研究者に対しても参加が呼びかけられている。私ができるかぎり多くのセッションに参加して得た印象では, 各セッションの座長にはそれぞれの部門の第一人者が当たり, 若手の研究者を積極的に支援する姿勢がうかがえたこと, メキシコ, 中米, カリブ諸国, ペルーへの関心が強かったこと, 女性研究者の発言が活発であったこと, 視聴覚機材を利用した報告が効果的であったこと, などが注目された(同学会の会則, 年報等の詳細について関心のある方は1983年4月には私が帰国いたしますので, ご連絡下さい)。

IV) 東日本部会第5回定例研究会 (1982年11月13日) 報告要旨

コスタリカにおける経済開発の現状と
国際技術協力の問題点

創価大学大学院

東 祥 三

国連工業開発機構の職員として2年間コスタリカのUNOP事務所に勤務した経験を踏まえ, 同国のラテン・アメリカにおける文化的特殊性, 経済開発の現状及び国際協力特に国際技術協力における問題点について概観した。

コスタリカは, 人種, スペイン語の表現法, 物の見方において他のラ米特に中米諸国に比較して異質な国であるといわれるが, とりわけ, 軍隊を全くもっていないこと, 教育水準が高いこと, 経済的貧富の格差が相対的に小さいこと, 気候が温暖でコスタリカ人民が比較的温和であること等を通して, 議会制民主主義を一貫して守り通していることにこの国の最大の特徴がある。

経済開発の現況については、同国は1960年代以降1973年ぐらいまで年平均実質GDP成長率が7%という高度経済成長を維持してきたが、その後、主要産品であるコーヒーの輸出価格が上昇した1976年77年の両年を除くと、石油価格の高騰と国際的インフレ及び国際的な不況の影響によって、国内に物価上昇と国際収支の悪化の問題が生じた。そして、1980年には、通常の輸入決済にも支障をきたすようになりGDP成長率は0.6%に鈍化、続く81年には△3.6%を記録するにいたった。その結果、インフレは一層高進、失業者は増加、対外債務累積残高の増大、通貨の大幅な切下げ等戦後最大の危機を経験している。このような問題に直面しつつ、1982年5月に新政権が発足したが、その解決には結局IMFやその他の外国の援助に頼らざるを得ない。ここにこの国の経済の最大の脆弱性が見出される。

他方、国連を中心とする国際機関や諸外国は、国際技術協力を通じて、同国の経済開発に積極的に努力しているが、そこには、同国の基本的、本質的なNeedsの認識に誤りがある故に、大量のDocumentは作製されているが、そのほとんどが実施に移されていないといったような問題点が存在する。現在、こういった点を踏まえ、既存の国際技術協力のメカニズムをも含めて、同国の開発に実質的に貢献できるように国際技術協力のあり様が検討される必要性に直面している。

V) 西日本部会第7回定例研究会 (1982年11月22日) 報告要旨

西日本部会第7回定例研究会は、1983年1月22日(土)午後1時から京都外国語大学国際交流会館で開催され、次の二つの研究発表がおこなわれた(出席者20名)。

1. 原田金一郎(大阪経済法科大学) インディヘニスモⅡ——日本ラテンアメリカ学会第3回定期大会シンポジウムの総括と批判

2. 高林則明(京都外国語大学) ミゲル・アンヘル・アストゥリアス作『トウモロコシの人々』——基底論理照出を中心として

原田報告は、副題が示すように大会シンポジウム(会報8号)を踏まえたものである。原田氏は、シンポジウムでは社会科学的方法が不足していたと批判したのち、社会

科学的方法の試みとして国内植民地概念を紹介し、さらに節合論からの分析の必要性を指摘した。節合論については周辺資本主義の将来像を節合解消説、不変説、継続説(形態変化説)にわけて説明するなど興味ぶかい指摘があった。またマリアテギ(「インディオ問題は土地問題である」)、「ペルー人口の五分の四は原住民である」)から出発してインディヘニスモを研究する原田氏にとって、節合論をインディヘニスモと結びつけることには必然性があるのかもしれない。しかしインディヘナとは何者なのか(定義する主体も含めて)という疑問が、最後までこのこった。

本年度は大会シンポジウムや西日本部会例会をつうじてインディヘニスモが論争的な中心テーマとなった観があるが、論議を尽くしていないことはもちろん、今後はカリブ海世界のアフロ的伝統や米国における少数民族問題との比較研究も必要となるであろう。

高林報告は、グアテマラ生れの作家アストゥリアスの『トウモロコシの人々』(1949)を論じたものである。高林氏によれば同書は、イスパノ・アメリカ文学内では<マジック・リアリズム>の傑作とされ、インディヘニスモ文学内ではインディオの心理描写によって新次元を画し、そしてアストゥリアスの作品中では作者の最も愛好する作品にして最も難解なものとしてされている。しかし高林氏は、主として米国におけるユング流の分析心理学の応用による作品解釈の試みを紹介したのち、神話的レベルでの論理(<日常的>論理がいわゆる西欧的論理とすれば<神話的>論理はインド・アメリカ的論理である)によってこの難解な作品を統一的に理解できることを提起し、火と水の対立イメージや超自然的知覚へと導く登場人物(ホテルの妖術師、治療師、薬剤師、黒い手の老人)の指摘をつうじて、それを具体的に論証した。

今回の例会には学会外からの来聴もあり、ラテンアメリカ研究に対する一般の関心の高まりを感じた。また学会員のあいだでも「原住民間問題研究会」(神代修氏らを中心として)をはじめ、いくつかの研究サークルが生まれつつある。年間4回にふえた定例研究会の運営についてはまだまだ課題も多い。ご叱正、ご助力をお願いする次第である。

なお、今回の研究発表は、京都外国語大学の関係者のご努力によって録音保存されている。
(文責 青木芳夫)

vi) スペイン史学会研究報告

1982年2月以降の研究会における研究報告は、以下のとおりである。

- 1982年2月6日 青木康征(神奈川大学)
「『コロンブス研究』の現在地と今後の展望——新大陸発見500周年へ向けて——」
- 4月3日 佐々木将実(東海大学)
「カタルーニャの革命における成果と展望(1936年7月19日—9月28日)」
- 5月29日 岡住正秀(上智大学)
「1861年のロハの蜂起について」
- 6月12日 芝 紘子
「Castilla王国のユダヤ人と農業」
- 7月3日 渡部哲郎(上智大学)
「バスク自治運動と左翼諸政党」
- 8月2日 金七紀男(東京外国語大学)
「ポルトガルの『衰退論』の新しい傾向」
- 8月2日 立石博高(東京都立大学)
「17世紀スペインの『衰退』をめぐる議論について」
- 8月3日 中塚次郎(東京大学)
「社会党左派と人民戦線」
- 9月11日 真下智枝子(津田塾大学)
「第二共和国『改革の二年間(1931-1933)』の南部における農民運動——FN T T, C N Tの農地改革への対応を中心に」
- 10月24日 富永ひろし(早稲田大学)
「エル・エスコリアル僧院とマニエリスム」
- 10月24日 長谷川貴士(神戸大学)
「フランコ体制下における労働運動の一研究(1939-1975)」
- 12月4日 太田尚樹(東海大学)
「バレンシア地方における用水支配の史的
研究——Replacación前後(13-14世紀)
Huertaの支配をめぐって」
- 1983年1月29日 藤田一成(神奈川大学)
「スペインの没落——エリオットの見解を
めぐって——」
- また、1983年3月には会誌『スペイン史研究』第1号を発刊した。内容は以下のとおりである。

<論 文>

岡住正秀 「1861年のロハ蜂起の研究——
——第一インターナショナル前夜のスペイン・
アンダルシアの農民運動」

<研究ノート>

- 芝 紘子 「15世紀後半のカスティージャ王国におけるユダヤ人の土地所有と農業」
- 渡部哲郎 「バスク地方自治運動の一側面——第二共和国、内戦の波紋：統一戦線の一類型——」

会員数は、現在74名であるが、研究会、読書会、あるいは会誌『スペイン史研究』の発行を媒介に、研究をより発展させるべく努力したいと考えている。

スペイン史学会への入会を希望される方、『スペイン史研究』の購入(頒価¥1,000)を希望される方、また定例研究会の通知を希望される方は、下記までその旨御連絡下さい。

〒187 小平市津田町 1491

津田塾大学国際関係研究所 気付
スペイン史学会委員会

vii) LASA大会メキシコ市で開催

全米ラテンアメリカ学会の第11回大会が、9月29日から10月1日にかけてメキシコ市のフィエスタ・パレス・ホテルで開催される。多数のセッションとさまざまな催物が予定されている。出席申込みその他のお問い合わせは下記へ。

L A S A Secretariat
Sid Richardson Hall
Unit 1
University of Texas
Austin, Texas 78712
U. S. A.

viii) 社会学ラテンアメリカ会議の開催

10月3-8日にかけて第15回社会学ラテンアメリカ会議がニカラグアのマナグア市で開催される。同会議は「ラテンアメリカにおける大衆参加と開発戦略」を主題とし、さらに「ラテンアメリカとカリブ海域の開発戦略」、「開発戦略研究における理論と方法の諸問題：大衆運動と大衆参加」、「資本蓄積と国際化の新局面に対する大衆と大衆運動および大衆参加の意味について」、「ラテンアメリカ

とカリブ海域における大衆参加の戦略と経験」の4つの部会が予定されている。お問い合わせは下記へ。

Comité Organizador XV Congreso Latinoamericano de Sociología
Apdo. Postal 167-C
Managua, Nicaragua, C. A.

ix) アンデス・シンポジウムの開催

1982年12月大阪で開催したアンデス・シンポジウム(会報第3号参照)の継続として、中央アンデスの生態学的補完性に関するシンポジウムが、1983年5月18～25日に、フロリダのCedar Coveで、ウェナグレン人類学財団の主催のもとに開かれる。5カ国22人の人類学者、歴史学者、地理学者等が参加し、日本からは、増田義郎はじめ6名が出席する。

x) 集英社「ラテンアメリカの文学」の刊行

本会賛助会員である集英社から、本年6月「ラテンアメリカの文学」全18巻の刊行がはじまる。内容は以下の通り。1. ボルヘス「伝奇集他」(篠田一士訳) 2. アストリアス「大統領閣下他」(内田吉彦訳) 3. カルペンティエール「失われた足跡他」(牛島信明訳) 4. オテロニシルバ「自由の王ローペ・デ・アギーレ」(牛島訳) 5. オネッティ「はかない人生他」(鼓直訳) 6. ムヒカライネス「ボマルツォ侯の回想」(土岐恒二訳) 7. サバト「英雄たちと墓」(桑名一博・安藤哲行訳) 8. コルタサル「石蹴り遊び」(土岐訳) 9. ピオイニカサーレス「豚の戦記、日向で眠れ」(荻内勝之・高見英一訳) 10. ロアコバストス「汝、人の子よ」(吉田秀太郎訳) 11. ドノソ「夜のみだらな鳥」(鼓訳) 12. リスペクトール「G・Hの受難、家族の絆」(ナオエ・タケイ訳) 13. ガルシアニマルケス「族長の秋」(鼓訳) 14. フェンテス「脱皮」(内田訳) 15. ガブレラニインファンテ「亡き王子のためのハバーナ」(木村栄一訳) 16. プイグ「蜘蛛女のキス」(野谷文昭訳) 17. バルガスニジョサ「ラ・カテドラルでの対話」(桑名訳) 18. ブライスニエチュニケ「幾たびもペドロ」(野谷訳)

xi) ラテンアメリカからの訪日者リスト

○1983年度国際交流基金招聘者

GARCIA, Daris, Lilitiana (アルゼンチン・42才) サルバドル大学東洋学部教授、日本の浄土真宗の研究

BAYON, Damian Carlos (アルゼンチン・67才) パリ第3大学客員教授、日本の美術・建築の研究

COSTA, Messias (ブラジル・39才) ブラジリア大学教育学部准教授、日本の教育財政の研究

TANAKA, Michiko (メキシコ・39才) エル・コレヒオ・デ・メヒコ教授、1960年以降の近代化過程における日本の農業技術と農業組織の分析の研究

ALÉN RODRÍGUEZ, (キューバ) キューバ音楽研究振興協会理事長

MELÉNDEZ, A. (ドミニカ共和国) 国営放送局委員会委員、国立文化研究所創設準備委員会会長、国営優秀映画フィルム管理所長

SANCHEZ, C. (パナマ) パナマ大学総長

DE SOUZA, C, F, M (ブラジル) 連邦区(ブラジリア)文化財団理事長

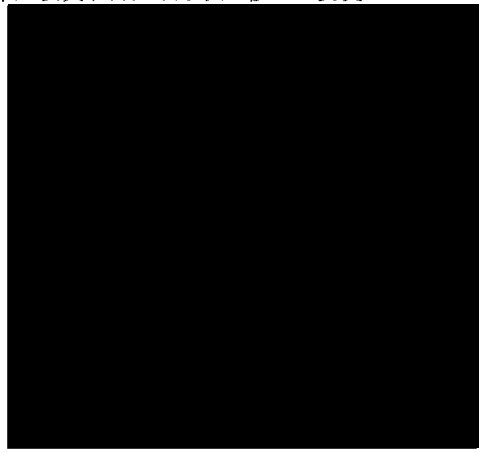
CHADAREVIAN, L (ブラジル) サンパウロ美術館映画部長、映画評論家

VIEIRA, A, G (ブラジル) サンパウロ大学総長

FREYRE, F, A, G, M (ブラジル) ジョアキン・ナブコ財団専務理事

3. 事務局から

i) 会員名簿記載事項の修正・変更



東日本部会 第6回定例研究会のお知らせ

日時 1983年4月16日(土)14:00~16:30

場所 上智大学六号館311号教室

(国電・地下鉄線 四ツ谷駅下車)

報告 1. 「ペルー軍革命政府の軍内政治の
動態 1968 - 1976年」

大串和雄(東京大学大学院)

2. 「キューバの東部地方における砂糖産業の発展—アメリカ系砂糖企業の進出と西インド諸島ブラセーロの利用問題」

長津久子(一ツ橋大学大学院)

☆お問い合わせは上智大学・高山智博まで。

(03-238-3941)

☆新入会員は、前号掲載分とあわせて別紙御通知いたしますので名簿にお挿込み下さい。
☆会員名簿記載事項(所属機関、連絡先住所・電話番号)に変更がございましたらお知らせ下さい。海外に長期滞在なさる場合にも、滞在地連絡先・滞在期間と合わせてその旨御通知ください。

ii) 1982年度退会者

皆様の益々の御活躍をお祈り申し上げます。
iii) 会費納入状況について 2月18日現在で未納者数は、3年分3名、2年分13名、1年分26名、延べ人数で61名であります。昨年11月時点の112名からかなり改善されましたが、一層の御協力を願います。払込先は、

○郵便局振替口座 東京1-13630

(日本ラテンアメリカ学会名簿)

○第一勧業銀行渋谷支店普通預金口座

1262358 (日本ラテンアメリカ学会代表増田義郎名義)

iv) 第四回大会組織進行状況について

組織委員会構成は以下の通り(以下敬称略)。委員長中川和彦、委員は国本伊代・高山智博・福島正徳、及び事務局員。3月1日(火)に成城大学で開かれた会合において大略の方針を定めた。研究報告(二日目6月5日午前)は三部会を設け、各々「植民地時代(松尾佳枝・真鍋周三)」、「労働運動(大倉秀介ほか)」、「移民(稲村博・三橋利光)」となる予定である。シンポジウム(同日午後)の主題は「ラテンアメリカにおける都市と農村」。現在のところ前山隆・山田陸男両氏に報告をお引きうけいただいている。本記事の情報は3月11日現在のものである。

組織委員会の連絡先は事務局。

v) 原稿をお寄せいただきます時には、印刷の都合上、かならず20字詰横書きにしてくださいようお願いいたします。

No. 11 1983年4月1日発行

日本ラテンアメリカ学会事務局

〒153 東京都目黒区駒場

3-8-1

東京大学教養学部8号館

中南米分科気付

☎ 03(467)1171

内線579